

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別換承認雜誌第六二七号
平成二十四年十月一日発行（第四百十五卷第十号）

ホトトギス

十月号



俳句随想 〔三百六十四〕

汀子

自分の家の地下に降りる書庫がある。少し広くなった廊下の真中を四角く切つて蓋があり梯子をつけた簡素なものであった。その廊下の穴に私は落ちてしまった。深さは二メートルもなかったが、本を整理し終つた時に開いたままになっていて、書齋へ行こうと台所を走り出た私は落ちたのである。宅急便が来たので荷造りの様子を見に行こうとしていた。一月余り入院と言うことになり私の行っている俳句会が全部キャンセルになった。朝日俳壇は一度だけ休ませて頂いたが、その後は、廣太郎の助けを借りて病院で選句をしている。ホトトギスの十月号の「天地有情」も荒川ともゑさんに、出張校正を病室でして貰いながら、済ませた。再手術も無事に終り、左上腕部にチタンの人工骨がおさまって今日午前に退院するまでに至った。

何ともどじな主宰でお詫びの仕様が無いが仕事をしながらの入院は私に活力を与えてくれたように思う。まわりの方々には本当に力を貸して頂いた。私の家族も、特にアメリカシアトルから駆けつけてくれた娘がずっと助けてくれて、明日アメリカへ帰る。元氣ぶっていた私の骨が年相応の老化をしていたので、再手術をしなければならなかったのだと思っている。今後は少し自分の年齢を考えて仕事をしたい。宜しくお願い致します。

旬日記 汀子

平成二十三年十月一日 芦屋ホトギス会

ふたたびは戻らぬ月日石榴熟れ
青空の变幻自在 鰯雲
急逝の友又一人そぞろ寒

十月二日 下萌旬会

秋晴の朝を発ち来し五百軒
急逝の仲間を悼む秋の晴
淋しさと別に秋晴たまはりし

十月三日 ロイヤル吟行会

秋日和競ふホテルのシャンデリア
咲き残るもの秋惜む心かな
地下鉄で一本秋の薔薇に着く

十月七日 工業倶楽部

横川路の野菊に懐古ありしこと
朝の雨上つてをりし野菊かな
秋風に開け放されし厨窓
カーブ又カーブ野菊の右左
ばかりと空きたる時間秋の風

十月八日 悼長尾麗星様

十三夜 近き温顔偲ぶのみ
十月九日 和田先生講演会

快晴の秋灯暗しとも思ふ
芒穂をほどきたるより風のもの
秋深し心に積みてゆく知識

十月十日 たつの市民俳句大会

偲びてまただなつかしく爽やかに
秋草を活けし心を手向けたし

十月十一日 大阪倶楽部

群れてぬしことに眼白と知られけり
菊日和よりはじまつてゐる講話
又一つ 計報 届きて 露寒し
菊活けて部屋 of 空気を入れ替ふる

十月十一日 綿業倶楽部

計報また偲ぶ今宵の十三夜
食べられる茸と言はれても躊躇
欠けるなきとは光得し後の月

十月十日 清交社

一切の音を消したる後の月
晦出て椋鳥の行先ある如く
通ひ路の桜紅葉と気づくまで

椋鳥と気づきたるより二羽三羽
一雨に桜紅葉のはじまりぬ

十三夜よりは名告らぬ月とこそ
明日西の虚子忌に雨の予報とや

十月十四日 西の虚子忌

叡山は虚子のまほろば紅葉濃し
集ふことすなはち西の虚子忌かな
誰彼を偲ぶ横川の霧 去来

十月十八日 有恒俳句会

どこまでも大空伸びて渡り鳥
朝寒の消ゆると信じ出掛け来し
席理めてゆく朝寒の失せてをり

渡り来しばかりの鳥と見ることも
六甲の山並低し鳥渡る

又一人 計報 届きぬ 朝寒し

十月十八日 無名会

椋鳥の来てゐる庭と気づきたる
狼籍の椋鳥でありしもなつかしく
災害に椋鳥の時の失せし藪

紛れ来し椋鳥に気づかれをりにけり
きりたんぽにも別離あり回顧あり
十月十九日 夏潮旬会

爽やかといふ淋しさに人偲ぶ
到来の梨とて剥いて供さばや
冬近し庭芝手入れあるがまま

十月二十日 クラブ合同

常席の空いて秋さぶ会となる
半年に一度は会へて秋の風
咲くものも散るものも秋風のもの

十月二十一日 時雨旬会

渡り来し鳥のささめき湖のもの
海近き松十本の新松子
午後雨になる滞在の露けしや

役終へて竿に戻りし案山子かな
横川路の今年の霧の深かりし

十月二十二日 句会と講演の会

音それと気づきし家居秋の雨
十月二十六日 年尾忌

爽やかに集へば晴るる忌日かな
三姉妹一人欠席 年尾の忌

十月二十七日 きさらぎ会

風強き一掃の雲 秋深し
散ることを惜しまぬ桜紅葉とて
東京の滞在の晴惜む 秋

夜遊びに似て秋の星見る企画
二日目へ続く 年尾の忌 日晴

十月三十一日 摩耶山俳句大会

摩耶山の秋惜む 晴賜りし
やがて冬支度はじまる山ならむ
雲天に返して山の秋惜む

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十三年十月一日 芦屋ホトギス会

秋の山越え秋の山抜け芦屋
石榴爆ぜ里山黙を解き初むる
故郷は尻尾の辺り鱚雲
そぞろ寒供華の白さにありにけり

十月一日 田原憲治様悼句

肥後の山粧うて一訃報かな

十月二日 野分会芦屋例会

京の街時代祭の色となる
草動くより猪の突進す

十月三日 はせを句会

朱は彼岸白は此岸や曼珠沙華
石榴爆ぜ山の天気の設定まれり

十月五日 カトリック新聞選者吟

底紅の紅ほどに魂宿し

十月六日 蕉心会

長月の影のみ足の長き吾
鱚雲先月嵐やつたんや

爽やかに逆流したる隅田川

ラーメンの火照り解きゆく秋の風

初鴨を待ち兼ねてある水の色

秋の雲百態見せて崩れゆく

初紅葉恥ぢらひながら揺れにけり

風吹いて雨降つて槍降つて秋

十月八日 松兼山俳句会五百回記念句会

豊年を射貫く新幹線鉄路

出来秋を車窓に嵌めて賀へ急ぐ
馬肥ゆる大地未来へ伸びゆけり
野の色の卓に華やぎ藤袴
俳諧の昔を今に鶏頭花

十月九日 虚子記念文学館和田先生講演と句会

週末は故郷泊り窓の秋

十月十三日 土筆会

烏瓜引けば大地の目覚めゆく
東京にタワ一二つや天高し
森の音して烏瓜飛び出せり
石たたき虚空叩いてをりにけり

十月十四日 西の虚子忌

明日は祝ぎ今宵は西の虚子忌人
学ぶとは終りなき道西虚子忌

忌心は朝寒の駅発ちてより

十月十五日 「円虹」二百号記念祝賀会

秋灯下こんなええ会出たことない

十月十七日 朝日カルチャー若草句会

石榴熟れ里の空気の色変はる
虚子の後追ふ秋風に押されつつ
鉦叩都心は今日も不夜城に

秋風に空母出港して行きぬ

十月十八日 草木瓜会

菊をもて祝うて偲ぶ一会かな
色鳥や色無き風を従へて
微笑みは菊に囲まれたる遺影

色鳥の色を零せし梢かな

六甲の色を尽して色鳥来

十月十八日 林久雄様悼句

大菊を咲かせ逝きたる君のこと

十月二十日 登高会

通草熟れ山気共々割れ初むる
祝ぎの座を彩つてある秋の声

十月二十一日 「円虹」円心集出句

初富士に蔵す数多の命かな

初刷のインクに命宿りけり

鍬始大地の命起こしつつ

双六や命を賭けた恋もして

長命の薬と信じ年酒酌む

十月二十一日 ホトギス杜句会

薦絡む教区司教座大聖堂

薦潜る選手もフアンも肩落し

癒えし目で小さき文字読む秋灯下

十月二十三日 野分会東京例会

君の過去時代祭の中に消ゆ

猪に里の空気の引き締まる

豊臣は時代祭の中に生き

猪を飼ふ婆として恐れられ

十月二十五日 若水句会

優しさの記憶しかなく年尾の忌

松茸の香に近づいてゆく帰宅

寿福寺に咲くもの数多年尾の忌

十月二十六日 年尾忌

継ぐといふ決意新たに年尾の忌

年尾忌や又タイガースだめでした

石路の花忌心ほどに開き初む

十月二十七日 目黒学園句会

冬近き鉄路の音でありにけり

楽聖の墓へ木の実を踏みながら

空の色海のいろにも冬近し

忌を一つ修してよりの冬近し

俳人の眠る一山冬近し

雑詠

廣太郎 選

大玻璃に溢るゝ光初夏の婚	松山	中野匡子
ウェディングドレス裾引く薔薇の道	同	同
薔薇の香のフラワーシャワー二人の歩	同	同
鯛網を絞る瀬戸内海絞る	米子	中村囊介
出漁の前の船縁三尺寝	同	同
白牡丹ひかりと影を相纏ふ	同	同
松蟬や砂立ち上がる風の道	神戸	山田佳乃
薄闇にほどけてゆきし藤の波	同	同
小言言ふのは新茶の葉ひらくまで	同	同
また別の遠足のぼり来るお城	京都	安原葉
リウ咲くと聞きふるさとを恋ふ女	同	同
霾れる富士全容を失はず	同	同
海風にふくらみ揺れて雪柳	熱海	嶋田一步
海風にはつきり咲いて山躑躅	同	同
海風に大ゆれ小ゆれしての萩	同	同
さみだれの真只中の誕生日	東京	今井千鶴子
夏帽子そちらへ行くと遠まはり	同	同
武器飾る後醍醐帝の裔の宿	同	同

風五月こぼるるものはみな光り	神戸	藤井啓子
鳥図鑑五月の風がページ繰る	同	同
日の不思議月の不思議を見る五月	同	同
喜々として跣足になりて瀬に降りて	同	同
微の香に馴れねばならぬ新宿舎	榎原	稲岡長
はんざきのゆつくり浮かび来る手足	同	同
闘志まだ持たぬ丸味の袋角	八尾	山下美典
濃き色に疲れて薔薇を離れけり	同	同
薔薇園の甘き香りを奪ふ風	同	同
開かんとしたる薔の日永かな	静岡	須藤常央
雲一つ日永を育てをりにけり	同	同
カーテンの日永に風のなかりけり	同	同
どんな人来るのか小さき花筵	渋川	山本素竹
花の枝一夜の雫落としけり	同	同
夜桜や座れる石に温みまだ	同	同
噴水の空に潰されぬる間	香川	湯川雅
透けきらぬ愁ひ漂ひぬる海月	同	同
雲去れば空を纏ひぬ桐の花	同	同
庭明り板間明りに夏炬あり	奈良	古賀しづれ
山湖一枚万緑の平面図	同	同
万緑の山湖に浮べたき古城	同	同
豆飯の豆かた寄つて炊きあがる	龍ヶ崎	今橋眞理子
一と刷けの赤を葉先に若楓	同	同
柿若葉梯子たてかけられしまま	同	同

雑詠句評（九月号より）

葉・中正・むつみ

憲明・とほ歩・千鶴子

保佳・静龍・美奇

眞理子・廣太郎

満開の花に饒舌なる視線 香川 湯川 雅

一読して、満開の花の情景にくり出した大勢の人物と賑やかなその場の雰囲気伝わってくる。満開となった花の情景の素晴らしさに人々は驚嘆し、心高ぶっているのであろう。吉野山で詠まれた句であろうか。「満開」「饒舌」「視線」という、やや硬質なひびきの語も程好くおさまり、特に「饒舌なる視線」という措辞は、簡にして要、言い得ていると思う。（葉）

吉野山等のさぞ桜の美しい場所で花見をされている様子が想像出来る。花に見惚れていて、言葉にもならない感動を覚えているのだろう。一般的には「饒舌」という語は言葉の印象があるのだ

が、それを敢えて「視線」という語と組み合わせた事により、一層季題の美しさが伝わってくる。（廣太郎）

風揚げて一人一人に違ふ空 神戸 山田佳乃

言われてみればこの句のように、「風揚げ」といっても一人一人みな違うのである。大きい風もあれば小さいのもある。風の絵柄も違えば連風もある。高空に舞う風もあれば、子が引つ張って走る風もある。そのように「一人一人違ふ」と詠むことで、一人一人がそれぞれ風揚げを楽しんでいる様子が十分に描かれている。この句、着眼点でも、省略した表現においても、的確である。

さらにいえば、風揚げに限らず何でも、「一人一人違ふ」ことが良いことなのである。それぞれ多様で個性的なことが、楽しいのである。一人一人のそれぞれの空に未来があつて、いかにもお正月らしい明るくのびやかな句である。（中正）

本来「風」は春の季題である事を彷彿とさせられる句である。実は筆者も風揚げは結構得意で、大学生の時、友人の通っている兵庫県のKG大学の文化祭で風揚げ大会に飛び入りをして、二位が三位になった記憶がある。正にこの句の情景であつた事も覚えているが、春風をも感じる事が出来る。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

法衣また濡るるもご縁花の雨	京都	安原 葉
濡れ衣乾かすことも花の宿	同	
桃の日や桃の一枝活けしのみ	大阪	辻 千緑
にぎやかな雪解しづくの音となる	同	
学食の梅雨湿りせる七味かな	神戸	三村純也
蔵書とは梅雨忍び寄るものばかり	同	
読まれずに徴となりたる書のひとつ	箕面	井上浩一郎
茫々の山雨に朴の白さかな	同	
馬券飛ぶとぶ春雨を纏ひつつ	東京	稲畑廣太郎
草青む上を蹄の弾みたる	同	
わが過去へ過去へ落花を踏んでゆく	静岡	須藤常央
桜葉降るや大地に遊ばんと	同	
もの思へとや麦秋の水のいろ	熊本	岩岡中正
麦秋のひとりの旅もよかりけり	同	
てのひらに雲載りさうな露台かな	神戸	長山あや
曾祖父の島へ卯浪の手漕ぎ舟	同	
一力の角を曲れば春の宵	大阪	佐土井智津子
太陽の塔のうしろの春浅し	同	

人涼し俳句一つに結ばれて	奈良	古賀しぐれ
日課なりけり句作りも草取も	同	
洋館の錆びし鍵穴徴の門	東京	橋本くに彦
一陣の風にはじけし木下闇	同	
死は遠きもの近きもの遍路打つ	徳島	上崎暮潮
九十のわが誕生日花ひらく	同	
今の世に六男を持ち武具飾る	東京	今井千鶴子
六月の影も豊かに大櫓	同	
妻ありてこそその卒寿の更衣	吹田	宮崎 正
金環蝕老いの二人の声うらら	同	
山に富み水に富む街風薫る	金沢	藤浦昭代
星涼し金環食のありし空	同	
花舗どつとカーネーションの増えて今日	熱海	嶋田 一步
雑貨店今日はカーネーションも売る	同	
渾々と水行く音や花の下	樺原	稲岡 長
花咲爺よべ中千本駆け抜けし	同	
植糸しものみな活きいきと卯月雨	東京	河野美奇
海の綺羅海風の綺羅柿若葉	同	

子選

天地有情句評

汀子

若き日の意欲をなつかしみ。

馬券飛ぶとぶ春雨を纏ひつつ

東京 稲畑廣太郎

経験の中での一駒。

法衣また濡るるもご縁花の雨

京都 安原 葉

自然と名僧。

花の作者の追想に誘われてゆく。

桃の日や桃の一枝活けしのみ

大阪 辻 千緑

自然と共に生涯を全うされた。

広大な麦秋と一人の詩人。

麦秋のひとりの旅もよかりけり

熊本 岩岡中正

蔵書とは梅雨忍び寄るものばかり

神戸 三村純也

梅雨に処する配慮を心して

曾祖父御木本真珠王への想い。

曾祖父の島へ卯浪の手漕ぎ舟

神戸 長山あや

読まれずに微となりたる書のひとつ

箕面 井上浩一郎

(以下略)